

---

# ラセン

丹歩々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラセン

### 【ZINE】

Z2524Y

### 【作者名】

丹歩々

### 【あらすじ】

お断り

同一題名

「ラセン」

作者：夢咲 春風

は私、丹歩々の作品です。

-あらすじ-

遙か昔、一人の人間が殺人を犯し、その罪の自責により、自殺した。その人間の魂は、神の造った「定め」に従い、地獄という場所を用意された。

慈悲深い神は、それらの魂を救うため、再び地上に再生させた。

再生された魂は、また地上界で自由を得た。

はたして、再生された魂は、また繰り返して罪を重ねるのか？ 逆に善行を以つて、罪を排除出来るのか？

魂の浄化の闘いが、始まる。

## 第一章・セバスチャン

そこは、罪を犯して死んだ靈魂たちの、償いの場所であった。

その場所には、多くの靈魂たちがあった。

その靈魂たちは人間の型をしていたが、男でも無く、女でも無かつた。

靈魂たちは、個々に「えられた、黒い球の中にいて、孤独であった。

その球は、光が完全に遮断された、ゴムのような膜であった。

靈魂たちがどのようにあがいても、出ることは出来なかつた。

球は、魂たちの、怨念の深さに応じて、廻り続けていた。

ゆっくりと廻る球もあれば、破裂しそうに廻る球もあつた。

靈魂たちはその速度に応じて、歩き、また走らなければならなかつた。

その球は大きくななく、直径が等身大であり、靈魂たちは圧迫の恐怖にもいた。

聞こえるものは、外の球の呻きの声だけであった。

それらが球の中で、自分の呻きと共に、共鳴していた。

外の呻きも、決して休息する事はなかつた。

球の回転に追いつけずに、足を取られ、バランスを崩して転がる靈魂たちがあった。

転がると突然球体は、鋭いの刃を突起させた。

靈魂たちを立たせるためだ。

地面に横たわる事すら、許されなかつた。

その刃の数も、怨みの数に比例していた。

靈魂たちはその度、強烈な痛みを受ける。

鈍い音を発して、靈魂体に、強烈に突き刺さる。

臭うものは、靈魂に突き刺さる、刃の摩擦の焦げた臭いだけであった。

さらりと、玉の中の気温は、灼熱と極寒が交互にやつて來た。

地獄とは”永遠に救われない”と思つ認識の中にあつた。

そのような玉が、その場所には數えきれないほどあつた。

常に新しい玉が、天上からゅつくつと落ちて來ていた。

それは一つのもの、また二つにくつついたもの、などがあつた。

苦しみだけに集中させられる世界。

そこは神が完全に見捨てた、爬虫類の卵のよつて、薄暗い平面に置き捨てられた世界であった。

幾年分の時が流れただろうか、その中の一つの球に、変化が起った。

ここにある靈魂達は、球に入つたとたんに前世の記憶は無くなる。

しかし、その球の一つの靈魂に、前世の記憶が、突然沸き起つた。

「「」めんなさい」

と靈魂体が叫んだ瞬間、球が真つ一つに割れ、光が溢れる世界が現れた。

その光り輝く世界には、一本の木が、並んで立つていた。  
輝きの源はその木であった。

現れた空間は、平面が無く、木も靈魂も宙に浮いていた。

木が放つ光は、下にも上にも、前にも後ろにも四方を輝かせていた。

その木の大きさは計り知れなかつた。

四方に伸びた枝々は、放つ光の眩しさで、どこまで伸びているのか、分からなかつた。

その幹は、常に伸び続けていた。

靈魂は、その輝く木の前に平伏した。

その靈魂はなぜ、自分があの玉の中に入つたのか、地上界で犯した罪の記憶が完全に蘇つた。

「セバスチャン」

輝く木が語つた。

「私は命の木であり、善惡を知る木です。  
またアルファであり、オメガでもあります。」

セバスチャンと呼ばれた靈体はその時、地上界を去つて直ぐに、この輝く木と対面した事を思い出した。  
その時に言われた言葉を思い出した。

「罪深い靈魂よ、

あなたを私の國に、迎える事は出来ません。

あなたの魂に相応しい世界に、行きなさい。

再生は、今は許されません。」

と言われたのを、思い出した。

再度対面した今、靈魂は、輝く木の前で懺悔した。

「木よ、おゆみじください。」

輝く木は、靈魂に語った

「再度の試練です。

あなたの未来から、私に言葉が届きました。

その言葉とは、あなたの来世が、私に「許しの言葉」を叫びました。  
ゆえにあなたの球を私は、今割きました。」

（その靈魂はずっと球の中にいて、なぜ未来から声がしたかは、その英知を解明出来る人間はいない。）

靈魂は感慨に答えた。

「『慈悲ありがとうございます。』

輝く木は、さらに続けた。

「あなたは、前の世で、二つの過ちがあります。

一つは、人間を殺したこと。

もう一つは、天命に背き、あなた自ら、命を絶つたこと。

浄化するためには・・・

輝く木は、セバスチャンに全てを語った。

そして輝く木は、最後に語った。

「セバスチャンよ、行きなさい。

次の世で、罪を浄化するのです。」

といふとセバスチャンは、この会話の記憶を奪われた。

セバスチャンはその場に倒れて深い眠りについた。

輝く木が与えた救いの場に、セバスチャンは旅発つた。

次元を幾つも超えて、新たな救いの人生が始まった。

人間には、到底理解しえない「神の許しの身業」がここに現れた。

輝く木はセバスチャンの再生のため、その靈魂を再び地上に蘇させた。

セバスチャンの生まれ変わりである「井上佑一」は、もちろん前世の記憶などなく、完全に人間として生きていた。

輝く木は、彼を蘇らせ、再び自由を与えた。

自由を獲得出来たセバスチャンは、また何をしてもいい権利を獲得した。

前世の時のように人を殺し、自らの命を絶つ事も自由である。

セバスチャンは自由を獲た替わりに、輝く木は、口出しする事も無くなつた。

「神の沈黙」

という地上界の攝理がセバスチャンに入つた。

## 井上祐一（セバスチャン）

その夜、空は多くの星座で輝いていた。

初冬の、そこ冷えする冷氣の中で、星座の配列は崩れる事なく、永遠に型にはまつた版画のように鮮明であった。

冷氣は、星座の光りが放つオーラと結合し、威厳ある田に見えない固体のように、地にある全てのものを支配していた。

井上祐一は帰宅した車から降りると夜空をしばらく仰いでいた。

それらの星々の輝きは、悠久の光を祐一に注いでいた。

「何千年前の光を浴びているのだろうか。」

仕事の煩雜さが、祐一に自然の中に溶け込む余裕を奪っていたが、その日は一年係りのプロジェクトがほぼ成功したため、余裕が導くよつて夜空に眼を行かせた。

祐一は知っている星座の形を追った。

それらの形は懐かしい郷愁の思いを抱かせながら、心の中に溶け込んでいった。

あたかも誰かに抱き締められているかのように、心が落ち着行つた。

しかし次の瞬間に突然、祐一の心に言い知れぬ「恐怖心」が襲つて来た。

オリオンの中芯から、刃が落ちて来る光景が脳裏に浮んだ。

「疲れているんだな。」

佑一は恐怖心を振り払い、誰もいない、温まつていなし、我が家へと入った。

佑一はソファーで音楽を聴きながら、ワインを楽しんでいた。  
そこへ携帯が鳴った。

「私だけど・・・」

別れた妻の真由美である。

「リサの運動会、来週の日曜日なんだけビ・・・  
あなた出でてくれないかしら・・・」

「ああ、願つてもない事だけど・・・

君達は・・・」

「私達、ちょっと新居の事で出かけるの・・・  
彼もその日しか時間がなくて・・・」

早口にまくし立てる。

もうそろそろべきなの、と言いたげな口調である。  
「いいでしょ！

貴方の一人娘に会わせてやるんだからー！」

祐一のグラスを持つ手が震えた。

「分かった、学校直接でいのかな・・・

別れた妻の今の夫は、佑一の取引先の男で田中誠といつ。別れた妻と誠との出会いは、スポーツサークルであった。誠は身長が高く、細身で、情に篤く、女性より気が付く男である。真由美は、佑一と誠が面識がある事は知らずに接していた。誠は七年前に奥さんを亡へしている。

子供は居なかつた。

誠は真由美を一緒の境遇と思っていたらしい。

「私も夫をなくしたの。」

の言葉に誠はだまされた。

「なくした」と語る言葉を誤解させ、真由美はたくみに誠に接近した。

真由美は、独り身になつた誠の寂しい心の隙間に入り込んで行つた。誠は三十半ばで、一流商社の取締役営業部長であった。

真由美には魅力のある肩書きである。

誠は真由美を愛した。

真由美も初めは、誠を愛した。

祐一達の結婚は十二年で終わつたが、真由美は三年前にデザイナーの会社を立ち上げ、社長であり、自立出来るほどの収入になつた。その頃から、真由美は佑一をさげすんでみるようになつていつた。佑一は妻の変化に耐えていた。

妻に新しい男が出来た事は、薄々感じてはいたが、まさか取引先の、懇意にしている誠であるとは思つてもいなかつた。

妻と離婚したあと、

誠から籍を入れた事を申し訳なく告白された時は、佑一は全く冷静でいられた。

「申し訳ございません。」

「いや、気にしないでいいよ。

これが彼女の望みであれば、それでいい。」

祐一は誠に対し好感を持っていた。

佑一に怒りや憎しみは沸いて来なかつた。

いや、かえつて真由美のさげすみのまなざしから開放される喜びの方が大きかつた。

ただ、一人娘のリサと別れる事だけが、悲しとして残つた。

しばらくして、今度は電話が鳴つた。

会社の経理主任の、山口亜利紗からである。

「夜分遅く申し訳ござりません。

山口です。

部長、今回のプロジェクトの成功、おめでとうござります。」

「ああ、山口君か、ありがと。」

お陰様で何とかなりそうだよ。」

「本当におめでとうございます。」

部長は人一倍、「苦労なされましたので・・・

ぜひ一言言いたくて・・・申し訳ござりませんでした。」

亜利紗は話してこるなり込み上げてくるものがあったのだらう。すすり泣く声が聞こえた。

経理主任といつても、山口亜利紗はまだ三十歳手前である。スレンダーでスタイルがよく、ロングの髪をなびかせて歩く姿は、モデルと言つてもおかしくない程である。

社内で、亜利紗に興味が無い男は、ほとんどいなかつたが、あまりの容姿と心の美しさに、皆、高値の華と諦めていた。

独身で、礼儀正しく、おまけに優しい性格なので、浮いた話もありそうなはずだが、佑一にそのような話が伝わって来た事がなかつた。

「「」家族団欒の中、誠に申し訳ござりません。」

「いや・・・

今日は一人なんだ・・・

「お一人・・・

奥様やお子様は・・・

「いや・・・

ちよつとね・・・

「やうでしたか・・・

失礼いたしました。

では・・

部長、おやすみなさい。」

離婚したことはまだ数人しか知らない。

まあ、知れわたるには時間の問題だらうと、佑一は離婚した後ろめたさはない。

それよりも妻のさげすみのまなざしの辛さにくらべれば、噂話しお主人公になる事など、取るに足らない事と思えた。

## 祐一へ入った夢

その夜、祐一は不思議な夢を見た。

仕事の疲れとワインの酔いから、熟睡しているのだが夢が向こうから強引に入りこんだ。

入り込んだ夢は「神」が与える「救いの身業」である。

内容は祐一には覚えさせず、前世で犯した罪の「心理的感覚」だけを残させ、そこから、再生させた現世で、救いの行動起こさせる「神」が与える償いの業である。

神が人間に持たせた「潜在意識」に働きかける業である。

祐一は冬であるのに、汗を流しながら目覚めた。

「この悲しさはなんなんだ。」

虚脱感で目覚めた。

男は木々の間から、ある家族を観察していた。

男は、その日の早朝に、馬に乗った家族の主が山を越えたのを確認していた。

山越えは、帰つて来るのに半日はかかる。

一時の時が流れ、主の妻が髪を束ね、川で夫の服を洗いだした。

名前はアンナであった。

この国のこの地方の人々の服は、一重の襦袢のような衣を、腰に紐で結んだだけの出で立ちであった。

男とこの家の主は兄弟である。

男は長男で、早くに他界した両親の財産を、ほとんど受け継いだ。この男の名はルドルフといった。働かなくても、裕福であった。

ルドルフは独り身であった。

二人兄弟の弟の方は、親から受け継いだ唯一の、町外れのこの土地で、妻と一人、質素に生活していた。

弟の名はセバスチャンといった。

貧乏であるのに、兄に頼つて来ない弟。

兄はそれが気にくわなかつた。

「何があるはずだ！」

兄は、その為にほとんど毎日、弟家族の不思議を探るべく、観察していた。

しかし、そこには何の特別はなく、平穩に過ぎる日常だけがあつた。

それを見続けて行くうち、男は徐々に、嫉妬の念に駆られて行つた。

嫉妬という悪魔が正当な視界を困惑させつつあつた。

そして、とうとうその日、

「羨ましいだらう」

と誰かが兄の心に囁いた。

うなずいた瞬間、悪魔が兄に入つた。

兄は女の前に行くと言つた。

「あなたの家で弟を待ちたいのだが。」

女は微笑んだ。

「親愛なるお兄様

さあ、どうぞ。」

女は自分の家に兄を迎えた。

女の本心は、夫を軽蔑していた。

「私は貧しい生活はいやです。

せめてお兄さんみたいなお金持ちの妻になりたい」

そう思つていた。

若くて美しい女の自由を、夫が奪つていると思つていた。

そこに、独り身で裕福な兄が来たのだ。

男の首には、金のネックレスが光つていた。

女にも、平穏の中に潜む、惰性の油断という業が入り込んだ。

女は胸の前の服を少しづつ見せた。

兄が動搖したのを、女は見逃さなかつた。

女がわざと見せる、かがんだ胸の膨らみ、そこから上目遣いに見る誘惑の瞳。

全てが入ってきたものの策略が進んで行つた。

食べ物が女によつて運ばれた。

「弟は毎日、この女を抱いている

お前は兄

あの女はお前を待つてゐる」

男は女を押し倒した・・

女は抵抗するふりをした。

男は女のばたつかす腕、脚を全身で受け止め、制止させた。

唇で女の露出している肌を舐めまわした。

女は感じ始めた。

憧れの男の胸は厚かつた。

抵抗が徐々に弱ってきた。

女は裸にされた。

二人に入りこんだもの達は、笑っていた。

女はその男に身を任せた。

二人は互いの身体を貪りあつた。

行為は絶頂に達した。

そこに弟が帰つて來た。

星座がきらめく夜空であった。

弟はそれら眺めながら、家路を急いでいた。

家の近くまでくると、呻き声が聞こえる。

徐々に近付くことに、それが鮮明に耳に入る。

その声に合わせるように、木が揺れて「コトンコトン」とリズミカルに歩調している。

弟は、まさかそこに、自分の信すべき者達の、不貞が織り成されているとは、夢にも思わなかつた。

弟は、飼つていた牛の出産だと思つた。

扉を開けた。

弟の落胆は、言葉にならない。  
神も弟の人生を哀れんだ。

行為は遮断され、女は泣いた。

男は、その震えながら立ちすくむ弟に笑いかけた。

二人の間に沈黙があつた。

信じていた者が、裏切りに走った現実に、弟は正氣を無くした。

その後に弟は激情のまま、無意識に、包丁で兄を刺した。

一刀で血が脇腹から溢れだし、下にいた女に垂れ流された。

女は恐怖で上に乗っていた男を跳ね除けようとしたが、男  
は女を抱き締め、放そとはしなかつた。

血が跳ね退ける力を滑らせ、男の脇腹には、女の手跡が幾線も赤く  
書き込まれた。

呻きと叫びが家の中、また家の周りの草原に木霊した。

弟は三回、男を刺して外に出た。

初冬のきらめく星座の下で、弟は全身に血を浴びた姿で崩れ落ちた。  
全てが終わった。

オリオンが極めて輝いていた。

幸せから絶望へ。

悟った瞬間、刃を自らの腹へ一刀に突き刺した。

弟は、神を罵倒して息絶えた。

その時に祐一はハッと目覚めた。

しかし夢の内容は隠されていたため覚えていない。

恐怖心と虚脱の気持ちで目覚めたのだ。

## 祐一と亞利沙

祐一はその日、経理主任の山口亞利沙を食事に誘つた。

祐一と亞利沙に関係のある人々から、完全に見られる事のない、会社から遠くにある高級フランス料理店を予約した。

祐一はタクシーから降りて店内に入ると、個室に案内された。まだ時間が早いため、店にはお客様が疎らだった。個室からは、シャンソンが流れ、黒光のするテーブルやイスが高級感を与えていた。

壁の絵画は淡い海辺の油絵である。

程なくすると、亞利紗が到着した。

「遠くまでごめんなさいね。」

「いえいえ

今日はお招きいただきましてありがとうございます。」

亞利沙は満面の笑みを称えた。

コートを脱ぐと亞利紗は白のスーツ姿であった。

ヒールを履くと祐一よりも少し低い位の身長である。

華奢な体付きではあるが、大きな胸と細いウエスト、スカートから伸びる長く細い脚。

コートを掛ける動作、スーツを脱ぐ時の了解を求めるタイミングなど、全ての行動と言動が、女としての品を漂わせていた。社内の男達が魅了されるのも、改めて祐一にはつなづけた。

「場所はすぐに分かったかな。」

「はい、タクシーの運転手さんが知つていましたので。」

祐一はあらかじめタクシー代を亜利沙に渡していた。

お釣と領収書を手渡しながら、亜利沙はウェイトレスが引いた席に着いた。

「ありがとうございます。」

といつも忘れない冷静さである。

改めて亜利沙と顔を向かい合わせると、その美しさに祐一は赤面する程のときめきを感じた。

「部長、この度はおめでとうございます。」

「いやいや、ありがとうございます。」

皆の頑張りのおかげだよ。

特に山口君には助けてもらつた。

感謝するよ。」

「いえいえ、私なんかご指示に従つただけです。」

「そんな事はないけど、まあ今日はプロジェクトの成功祝いといつことで乾杯しよう。」

「はい、部長ありがとうございます。」

二人はワインで乾杯した。

バラード的なシャンソンの音色が会話を滑らかにした。

亜利沙は、祐一すら忘れていた細かい指示に対して、感謝を述べた。祐一は久しぶりに接する、女性の優しさという魅力、に心を奪われた。

前菜が運ばれ、一人はフルコースを楽しんだ。

見つめ合つ二人の心は、時間と共に、より一層、近くなつて行つた。

「今日のお食事の事は、奥様はどう存じなんですか。」

急に亞利紗は悲しい表情で言つた。

「山口君、実は僕は離婚したんだ。」

「えっ・・・」

亞利紗は本当にびっくりしたようだつた。

そして、悲しみの表情から嬉しそうな表情を作り、一瞬その少し潤んだ大きな眼を、祐一から逸して言つた。

「じゃ、私にもチャンスがあるって事ですね。」  
下に逸した瞳が、輝きを持つて再び祐一に注がれた。

ワインの酔いで亞利紗は一段と色っぽさを増していた。

祐一はその言葉と表情に、言ひ尽くせない程の愛しさが沸いて來た。

肩まである髪を亞利紗はかき上げた。

髪から発せられる甘味な香りが、祐一には今まで嗅いだ事のない、

天上の最高の香りだと思つた。

店から出た一人は、肩を抱き合つていた。

タクシーに乗つてから手をつなぎ合つ、亞利紗は祐一の胸にもたれかかつた。

祐一は優しく肩を抱いてあげた。

ホテルに到着し、そこで初めて一人は結ばれた。

亜利沙の透き通る白い肌が、赤く熱を帯びながらベッドの上で官能のまま、なまめかしく、ゆっくりと震えながら動いていた。

祐一は優しく目の前の、愛しい肌に唇をゆっくりと重ねていく。  
その度に、亜利沙の小さな唇から、感じるままの喘ぎ声があがつて行つた。

祐一は唇を全身に這わせ、両手で亜利沙の全身を愛おしそうに擦つていく。

それに応えるように亜利沙は華奢な身体をくねらせ、悶えていった。

亜利沙の身体が『なりになり、のけ反る。

その動作は時間と共に妖艶さを増して行つた。

声はその動作と共有するようだ段々と大きくなる。

亜利沙は決して男を知らない身体ではなかつた。

しかし祐一のよう、心から愛されていると思つたのは初めてであつた。

亜利沙は男女の営みで初めて絶頂、という感覚を実感して行く。

祐一が愛しく唇でなぞってくれる場所、また愛撫している手のひらに触られる場所が、全部気持ち良さを通り越した「性感帯」になつて行くのを知つた。

亜利沙が逝くたび、二人は長く唇を重ねあう。

登り詰めた後、祐一はエクスタシーが引いていく余韻をくねくね、亜利沙を優しく愛し続けた。

亜利沙に対する思いやりが何回も亜利紗を逝かせた。

結合する前に亜利沙は何度登り詰めたか分からなかつた。

長い愛撫のあと、祐一は亜利沙の中に入つて行つた。

結ばれた状態で、祐一は亜利沙を抱き抱えた。

「亜利沙、愛しているよ。」

「祐一さん・・・  
愛して・・・  
ます・・・」

亜利沙は悶えながら言つた。

切ない程の美しい声。

祐一は亜利沙の中を優しく突いていく。

亜利沙は、もう死んでもいい、とすら思えるほどの最高絶頂を生ま

れて初めて祐一から『えられた。

亞利沙の中に入つてくるものが、奥に入るたび、亞利沙は絶頂に何度も身体をのけ反らせ、歡喜の喘ぎを発した。

その動きは、優しい程にゆっくりしたものである。

あくまでも亞利沙の感情に応えたスピードである。

その日、亞利沙は最高の頂上に達した時に、祐一も逝つた。

亞利沙は涙を流しながら、女性が発する声でない叫びをあげて逝つた。

祐一も人間が出すことはない「獸」の声を出しながら逝つた。

二人はこのように結ばれた。

## 亞利沙と真由美

二人が結ばれた夜。

祐一にまた、記憶を残さない夢が入った。

祐一の別れた妻である真由美がいた。  
場所は公園である。

真由美は八才と幼かつた。

真由美は泣いていた。

そこへもう一人、少女が現れた。  
三つ違ひの真由美の妹である。

妹は姉と遊ぼうとして姉の回りを走っている。

その中で幼い真由美は泣きじゃくっている。

妹は、姉に手を振りながら笑っている。

次の瞬間、猛烈なスピードで走つて来た自動車が、妹を跳ねて逃げ  
て行つた。

妹は十メートル程、飛ばされた。  
すでに死んでいた。

しかしそくに妹は立ち上がつた。

血まみれの妹はその場で回り始めた。

そのスピードは徐々に加速され、光を帯び始めた。

いつの間にか真由美はいなくなっていた。

その光は辺りを輝かせ続けた。

そうすると光の中から、成熟した女が現れた。

亞利沙であった。

亞利沙は満面の笑みを称えていた。

そこで夢は終わった。

事故で亡くなつた妹は、亞利沙に生まれ変わつていたのだ。

姉である真由美が、自らの意思で新しい男を作り、結婚生活において、何の罪も犯していない男との結婚生活を、放棄した罪。その結婚生活を、妹が復活させる事で、姉の姦淫の罪が許された。

「神の身業」は妹を亞利沙に蘇生させる事で、姉の罪を一つ取り除かせた。

後、姉に残された罪は、「傲慢」だけになつた。

祐一は幸せな気持ちで目覚めた。

もちろん夢を見ていたことは記憶にない。

隣りには亞利沙がいた。

目覚めた二人は熱い口づけを交わした。

お互に信頼が支配していた。

ここで神が人間に与える、”記憶に残さない夢”は「潜在意識」に働きかける。

人間が「恐怖心」を持つのは、実は神の「摂理」であるのだ。

## 真由美（アンナ）に入った夢

真由美が目覚めると、夫である誠がコーヒーを入れてベッドまで持つて来てくれた。

「おはよう、昨日は夜中にうなされて、夢の中で泣いていたけど、どんな夢を見ていたんだい？」

誠が言っている事が、真由美は何の事だか分からなかつた。

「えつ、私が夢にうなされて、泣いていたの？」

そう言われば、眼が腫れぼったい気がする。

「いいえ、私夢は見ていませんよ。」

「そう？ だつたらいいんだけど・・・  
さあ、リサを起こしてあげなきや・・・」

真由美は、心でまた吐いた。

夫の誠に対してある。

「出で行け！」

「バカ！」

実は誠は、会社からリストラを受けていた。

要は無職であった。

真由美はもちろん、この夫に対しても、嫌気、がさしていた。

「この男には、将来性を感じていたのにハズレたわ！  
どれもこれも、ただ優しいだけ！

私は、貴方達には、名譽を求めるわ、私は社長！私の身の丈に叶つて！」

と心で独白した。

この家族は、新しい生活に入っていた。

郊外のまだ自然が残る場所に、広い一軒家を購入した。

リサはまだ祐一の事を忘れられず、誠の事を「おじさん」と呼んでいる。

真由美もあえて誠のことを「お父さん」と呼ばせる事もしなかつた。  
すでに夫に対して、軽蔑、が生まれていたので、それは当たり前のことであつた。

誠はリサを可愛がり、呼び方さえ気にしなければ、どこから見ても親子であつた。

その中に真由美が加われば、どこから見ても、家族であり、再婚同士の家族などとは見られなかつた。

その過程で誠は失業した。

家族として成り立つものの中に、一家の長としての威厳がある。

しかし、誠は職が無い。

真由美は会社のオーナーである。

誠は途方に暮れた。

田に田に真由美の、傲慢、は激しさを増した。

昨晩、真由美の中に入った夢はこうである。

女は、田の前にある物々の前で笑つた。

自殺した夫が遺した、家畜達のふくよかな蠢く躍動。

それらを、女の動向を気にしながら、世話をする使用人達。

女は心で、自殺した夫に対して呴いた。

「死んでくれてありがとう。」

同時に死んだ夫の兄の、財産、まで女に転がり込んだ。

また女は心の中で、弟から殺された身寄りのない兄に対して呴いた。

「殺されてくれてありがとう。」

女は一人で生きて行くには、十一分なお金を同時に得たのだ。

女は直ぐに、それらを元にビジネスをした。

それが当たつた。

あくまでも女はしたたかであった。

裁判での席上。

「私は犯されました。」

と女に入ったものが言わせた。

「あの日、あなたは行為をしましたね？」

「いえ！していません！」

抵抗いたしました。」

「では罪は男にあると？」

「はいー。」

裁判官のサンチエスは困惑した。

調査ではあの日

「町中に聞こえる程の喘ぎ声であった。」

「あんな愛の営みは聞いた事がない。」

「夫婦仲は最悪だった。」

などと聞いていたからである。

「あなたは自害した夫を本当に愛していましたか？」

サンチエスは聞いた。

入ったものが言わせた。

「心から愛しました。」

「そうですか。」

サンチエスは諦めた。

しかし最後に良心を込めて、女に言った。

「自害した夫に感謝しなさい。」

また殺された義兄に感謝し、永劫に死ぬまで感謝し続けなさい。

富はあなたの物です。」

女は心で笑つた。

女に入ったものは地上から天に向かつて笑いかけた。

人間はこんなものだ

と天に向かつて言った。

女は、転がり込んだ物々のおかげで、遊び堕落した。

心も身体も傲慢に膨れて行つた。

使用人達は過酷な労働に泣いていた。

傲慢が、使用人達の、叫び、を遮断していた。

身体は贅沢で肥り、

ある日、女はベッドに埋もれて動けなくなつた。

贅沢で膨れた身体は、ベッドから身を起こす事も出来なくなつたのだ。

女は仰向けのまま、天に向かつて叫んだ。

「誰か助けて！」

当然、誰も助けには来なかつた。

すると、突然突風が起こり、女のいる屋敷を吹き飛ばした。

そして光り輝くものが、天から現れた。

女はあまりの眩さに、目を開けていられなかつた。

それはどのような形をしているのかすら、分からなかつた。

光り輝くものが、女に言つた。

「傲慢なる者

その元となるもので

清められなさい。」

「 というと、また突風が起きて、今度は飼っていた家畜の群れを畠に浮かせた。

それから突風は、一頭づつ、女にめがけて落として行つた。

肥えた家畜達が一頭づつ、起き上がりがれないほどに太った女の上に、鈍い音を発てながら、落とされて行つた。

女はその痛みに耐えられなかつた。

「許して下さい。」

と叫んだ時、家畜達の落下は終わつた。

突風は治まり、光の存在も無くなつた。

すると、辺りが暗くなり、程なくして一人の男が現れた。

一人は別れた前夫の祐一である。

もう一人は祐一が幼い時に、死に別れた弟である。

祐一は繋いだ手を放し、弟を自由にした。

祐一は消えた。

弟はよちよち歩きで、女に近寄り、動けない変型した身体を粘土を

こねるようにな再生して行つた

女はくすぐつたい感覚を我慢しながら、再生を待つた。

足が動かせるようになつた。

すると弟は女の手を取り、地上に立たせた。

弟は女に微笑んだ。

女はやつと安堵感を覚えた。

そこに道が現れた。

二人は手を繋ぎながら、その道を歩いて行つた。

ふと手の感覚が、子供のものから、大人の手に變つた。

女が横を確かめると、先程の裁判官のサンチエスが、凜として立つていた。

女はびっくりして、一度目を閉じた。

そして女が再度、横を見ると、誠に变つていた。

誠は笑みを女に投げた。

女はそれには応えなかつた。

すると、道が急に途絶えた。

女だけが、誠の手をすり抜け、道筋が無くなり、落ちていつた。夢はそこで終わつた。

真由美は虚脱感で目が覚めた。

神の摂理は、真由美の潜在意識に「傲慢の罪」を意識させた。

祐一の死んだ弟を、誠に蘇生させ、希望を失つた男に対して、いかに、愛せるか、という試練を与えた。

誠の靈は裁判官のサンチエスの蘇生である。

神はサンチエスの魂を一段上げるため、蘇生させた。

真由美の前世である、アンナの姦淫の罪は、死んだ妹を祐一に授ける事で、すでに許されていた。

後、残る罪は、傲慢、である。

真由美が誠を愛することと、前世の罪は完全に許されるのだ。

神の「救いの身業」が真由美に入った。

真由美は会社に行く途中も、後味の悪い気持ちが支配していた。

何か重大な過ちを犯し続けている感じがしていた。

しかし会社に到着して、皆が社長である真由美に対し、気を使い、ピリピリしている。

真由美よりも歳が上の男達が鼻で動く。若い男達は、真由美の美貌に見とれている。

若い女子達は、男を思い通りに操る技量に畏敬を感じている。真由美はそう思っていた。

その様を見ると、それらの気持ちは、一瞬にして去つて行った。

「私は無能じゃないわ。」

都心のビルの一層企業が並ぶ、高階にあるオフィスから見える景色。

その都会の象徴の窓辺から空を見ながら、真由美は呟いた。

「私は社長よ！」

## 田中誠

誠は職が無くとも、日中、家に居る事はしなかつた。

義理の娘であるリサが、小学校に行くのを見届けると、誠も家を出た。

妻の真由美は、仕事を理由に家を空ける事が多くなつていた。

誠が日中、新居を空ける理由は、もちろん周りの眼を気にしての事もあるのだが、それよりも新居のあの独特の臭いを嗅ぐのが辛かつた。

新しい家族が出来て、心機一転、心を弾ませて購入した新居。

頭金は全て誠が払つた。  
全部の貯金を投入した。

前夫婦では子供が居なかつたため、久しぶりに味合つ家族団欒の楽しさ。

初めてまして味合つ子供との遊び。

そういう思い出たちが、新居の臭いの中に想念と連結し、条件反射のように浮かび上がるのだ。

全てが上手く行くと思つていた。

しかし半年後、誠は失業し、無一文になつた。

真由美は自分の通帳を持っていた。

決して夫婦共有のものではなかつた。

誠はアルバイトをしながら正業を探せざるをえなかつた。

誠はハローワークに通い続けた。

誠にとって職は渴望するものであるが、本当に求めているものは、  
真由美の誠に対する愛の復活であつた。

真由美は社長である。

誠はへたな職に就くわけにはいかなかつた。

夫としての威儀を取り戻さなければならなかつた。

真由美が納得する職に就きたかったが、この時代は不景氣である。

誠は出口のない八方塞がりの境遇に、自立のふがいなさで押し潰されそうであった。

その日もハローワークには、職を求める人々でいっぱいであった。やつと求人情報を見れるパソコンが空いたのは、20分もしてからであった。

この場所にいる人達には笑顔がなかつた。

皆、明日への生活に対し、不安を通り越えた恐怖心で、怯えているように誠には映つた。

「僕だけでは無かつた。」  
と誠は安堵感を得た。

職員との相談は一時間待ちと表示されていた。

誠は求人の企業情報をプリントして、時間調整のため表に出た。

全く風が無い、晴天の空であった。

春の陽光が心地よく全ての物を照らしていた。

陽光をさえぎる場所の隅々までも、それは明かりとしての恩恵を受けていた。

誠は近くの公園のベンチに座り、求人内容を確認していた。

誠は管理職募集の企業を探していた。

それもある程度は名の通つた所を選んだ。

真由美が納得する企業じゃなくてはならなかつたからだ。

突然そこへ、強い突風が起つた。

公園のブランコが、それに押されるようにギヨシ、ギヨシと音を立てて揺れた。

誠の手からプリントした、求人の紙がすり抜けて行つた。

それはゆっくりと舞い上がり、ゆっくりと落ちて行つた。

誠はそれを取るために、小走りに落下する方面へ走つた。

紙はスーツとある人物の手に收まつた。

その人物は、駆け寄つてくる誠に笑みを返した。

風が治まつた。

ギロー！

ところ音を出したブランコは、徐々に振幅を弱めて行き、そして何事も無かつたかのように、音を消した。

その人の笑みは春風のように、爽やかであった。

誠よりも、十五くらい年上の、五十歳位の初老の男であった。

その男は、顔に満面の笑みを浮かべ誠を見た。

誠と田が合つた。

誠はその笑顔のさわやかさに魅了された。

それと、離れた場所から男を見ると、とても大柄な人だと思った。

誠は丁重に礼を述べた。

「どうもすみません。」

「いえいえ、飛んで行かなくて良かつたですね。」

誠は男の近くまでくる途中、何度も深々と頭を下げた。

男も帽子を取り、頭を下げる中、誠に挨拶を返した。

「はい、どうぞ。」

と笑顔で、紙を誠に渡した。

先程は大柄だと思えたこの男は、誠よりかなり身長は低く、中年にしては痩せていた。

誠自身が背が高いので、一般的の男性の身長ではある。

帽子を取つて会釈した頭は、髪の毛が頭の真ん中だけ無かつた。

瘦せてはいるが、腕は太く、顔と一緒に日焼けしていた。

「私もまだ、運動神経はありますね。」

と、誠に人差し指と親指で丸を作り、豪快に笑つた。

誠はその豪快な笑いに、心が一瞬に明るくなつた。

誠は忘れていた男としてのプライドが、この男を通して、蘇つて来るのが分かつた。

しばらくは不安な気持ちが忘れられる。  
と誠は、男に心で感謝した。

「本当にありがとうございました。」

「失礼ですが、職安の資料ですか？」

「はい、お恥ずかしい話ですが、求職中でして。」

「なんの、全然恥ずかしくないですよ。  
今の社会は弱いものイジメをしますからね。  
胸を張りましょう。」

誠は感激した。

ここ数ヶ月、このように励まされた事がなかつたのである。

辞めた会社では、出世頭の誠を良く思つていらない派閥の連中と同僚達が、社内だけでなく、取引先までも、ねじ曲げたウワサを吹聴した。

退社の挨拶をしに言つても、お茶すら出ては来なかつた。

家で、妻の真由美から

「もうあなたは終わりね。」

と言われた時には、男のプライドが崩れ落ちた。

誠はそれでも、自らの気持ちを奮い起させていたのだが、そろそろ崩壊寸前であった。

誠は込み上げて来るものを、懸命にこらえた。

「まあ、立ち話もなんですから座りましょう。」

と男は言った次には公園のベンチの方向に歩き出していた。  
動作が機敏で、無駄がない。

男はベンチの端に座ると、左手を振りながら誠を迎えた。

二人は、六月のそんなには強くない陽光の中で、しばらく沈黙した。  
先程の突風が、うそのように風は再び沈黙し、公園の隅々に咲く花達が、その色彩を競演している。

小鳥達が、何物も攻めてくる物がない安堵感で、間隔を空けながら、穏やかに仲間達と鳴いている。

新緑からこぼれる木漏れ日。

元気に遊ぶ子供達の笑い声。

平安といつ自然の空間が、一人の周りに存在していた。

誠は名前を告げると、再度先程のお礼を言つた。

男も誠に対して丁重に自らを語つた。

「私は竹崎真一と言います。  
しない中小の社長をしています。

田中さん、何処かいい所が、見つかりそうですか？」

男はベンチの隅に置いたスーツの内ポケットから名刺を取り出すると、誠に渡した。

(株式会社) タケザキ  
代表取締役、竹崎真一  
と書かれていた。

誠も長い会社勤めの習慣から、名刺を取り出そうとしたが、今は失業中であることに我に帰り、また自らを卑下する気持ちが戻った。

「いやいや、いいんですよ、時期に立派な名刺が必ず出来るでしょうから。」

真一は微笑みながら、誠に言った。

誠は男の言葉で、また救われた。

「社長さんで」「ございましたか。  
失礼致しました。」

誠はこの男、竹崎から受けたオーラに、やはりただの人ではなかつた、と納得して言った。

竹崎は穏やかな表情を作り、誠に言った。

「いやいや、社長といつてもたいしたことではありません。  
何か飲みましょう。」

「コーヒーでよろしいかな？」

と誠の頷きを確かめると、竹崎は公園の入口にある自動販売機に向かつて行つた。

誠が小銭を取り出す暇も『えず』に、俊敏に歩いて行つた。

公園を颯爽と歩いて行く後ろ姿には、威厳があった。

陽光が竹崎の白いワイシャツに反射し、誠に眩しく反射していた。

竹崎は誠に缶コーヒーを渡すと、誠の今ある境遇について聞いてきた。

誠は何故か、この竹崎に対して”警戒心”という感情を持つことが無かつた。

いや、それよりここ数ヶ月の、誠自身に降りかかった苦難を聞いてほしかつた。

誰にも、気に止められず、聞かれる事すらなかつた胸のうちを、吐き出しあがつた。

誠は一流商社に勤めていたこと、そこで派閥の罷によつてリストラされたこと、妻のこと、妻と自分の立場、などを包み隠さず竹崎に伝えた。

その間、竹崎は始終、誠の目を見て、頷き、時に腕組みをしながら聞いた。

誠は、心中にあつた鬱憤や不安などが、浄化され、心が晴れやか

になつて行くのを覚えた。

徐々に風が一人をかすかに触るように吹いてきた。

六月の草いきれの香りを含んださわやかな風は、強くなることはなく、一定の旋律で吹いて、彼方へと立ち去つて行つた。

陽光も徐々に、時間と共に強くなつて來た。

「まあ、人には必ずと言つていゝ程、試練が来る。誠さん、今がその時だと私は思いますよ。」

竹崎は笑顔で答えた。

何て澄んだ瞳なんだろう。気持ちを優しく包んで、吸い込ませる深海のよつな瞳。

誠はその言葉と瞳に、また救われた。

「あなたの妻が納得する仕事とは、具体的に何だと思いますか？」

竹崎は誠に聞いた。

誠は一瞬、答えに詰まつた。

ストレートに応えていいものだろうか？

誠は躊躇していた。

竹崎は誠の応えを分かつっていた。

「奥さんの肩書きに恥ずかしくない仕事とは？」

何ですかね？」

それでは奥さんの人生だけに、荷担しているだけです。」

誠はハツとした。

ハンマーで頭を殴られた感じだ。

心の全体を覆っていた”不安” ”喪失” ”失望” といった”負の思考”が球体の中に入り込み、そして誠の意識の中で大きな音を伴つて、破裂して行くのを覚えた。

「誠さん、全ては貴方の中にあります。

この世の中では、決して神様が救いの手を差し延べる事はありません。

自らで解決しなければなりません。」

誠の心に何かが目覚めた。

落胆から昂揚する希望の光りが灯つた。

「誠さん。」

面接は合格です。」

「はい？」

竹崎は、誠の肩に優しく手を置き、言った。

「井上祐一君は知っているね？」

「は、はい。」

「君が勤めていた時の、取引先の人間だね。」

誠は、突然竹崎の口から出てきた名前にびっくりした。

誠の妻である真由美の、別れた元夫であり、前職の会社での、取引先の会社の営業部長の名前である。

「はい、そうです。」

「祐一君が、田中誠という友達が失意の内にいるから、彼を助けてくれ。」

決してこの事は黙つてくれ。

彼は信じられる、俺の取引先の人間だから。  
と言つてきた。

だから今日、君に会つたんだ。

祐一君は、私の大学の後輩だ。

ある日、私の会社に来て、面識もないのに、私に君の事を頼み込んだんだ。

名簿で調べたらしい。

私は同窓会の幹事だからね。

祐一君は僕と一回り違つ。

勇気のある男だ。」

誠はその場所に崩れ落ちた。

そして大きな声を張り上げて泣いた。

その声は公園中に響き渡った。

遊びに夢中になっていた子供達も、遊びを止めて平伏して泣く誠を見守った。

竹崎は、嗚咽している誠の肩を、しづらしくから、優しく抱き抱えてあげた。

「あなた達の関係は、私はそれ以上は知らないが、いい友達を持ったね。

まるでお兄さんのように、心配していた。」

（後に分かる事だが、この出会いには、深いいきわしがあった事を、竹崎は誠には話さなかつた。）

誠は心で祐一に詫びた。

「いづなれば奥さんを奪つた形の俺なのに…  
そんな俺の為に…」

そして誠は、この竹崎に、自分の人生の行く末を任せようと、その時「決心」した。

「誠君。」

竹崎はポンッと、誠の肩を叩いた。

「明日の午後一時に、私の名刺の住所に来なさい。」

「わ、わかりました。」

竹崎は、歩きだした。

そして突然、振り向くと誠に言った。

「君には浮浪者、ホームレスになつてもらひつ。」

そう笑顔で言つと、颯爽と去つて行つた。

誠は度肝を抜かれた。

## つか動かされるもの

次の日、誠は市の中心から、電車で一時間ほど離れた駅に向かった。

竹崎から指定された場所の最寄り駅である。

車で行かない理由は、電車の方が速いだらう、という予想と、その方が安上がりだと判断したからである。

誠は貧窮していた。

妻である真由美が、投げつけるように『える小遣いを出来るだけ使いたくなかった。

このまま行けば、竹崎から言われる前に、僕は浮浪者になるなど、下り電車の混み合った中で、やつと確保出来た吊り革を持ちながら考えていた。

主要駅でほとんどの人が降りていった。

電車は人があらになつた。

ネクタイ族は皆無になり、それらしき女性もすかしながらいなくなつた。

誠は車両の一一番端の、三人掛けの隅に座つた。

前には誰も座つていなかつた。

電車の正面の車窓から、晩春の情景を、誠に与えた。

先ほどまでは、車窓からは、都会の無機質な造形色が覆っていたが、都会から離れるに連れ、自然の軟らかい、優しい顔を表して来た。

陽光が強く平地を照らしていた。

ビルの人工で塗りつくされた人間味のない色は無くなり、遠く緑の山々が、車窓の画面を、端から順に終わりなく、誠にパノラマのように映し出して行く。

その手前には、稻穂が陽光に抱かれるように、凛として立っている田園。

風は無く、電車の風圧がかかつた稻穂だけ、順番にたなびき、また毅然と立つて行つた。

川を渡る橋の下からは、キラキラと陽光が照り返しを誠に与えた。

誠は久しぶりに着たスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを緩ませた。

(僕は何に、つき動かされているのだろうか。)

誠は自問した。

(確かに昨日は、奇妙な一日であった。

今妻の前夫が、僕を心配して、ある男を紹介してくれた。

そして、その男が突然、昨日現れた。

そしてその男が、発した言葉の数々。

「面接は合格です。」

どのような会社かは、分からぬが、その男の人物を観るに、そう悪い会社ではなさそうだ。 )

(その時は、「この男に、自分の人生を任せてもよい」と一瞬、思つた。

しかし、

「君には浮浪者、ホームレスになつてもらひ。」

この言葉で、思考が混迷した。

そのような会社がある訳がない。 )

しかしその時、確実に、誠が求めているものは、妻の体裁を繕つものであつた。

会社を経営する妻の、そのパートナーに相応しい職業と肩書きを求めていた。

「奥さんの人生に荷担していいかね?」

(竹崎真一の言葉で、僕は、自分の人生の使命いう意味合いを、突き付けられたような気がする。

真にやりたい事はなにか? )

電車は山の中腹に差し掛かると、稲穂達や、山々の木々を抱きしめるように、内側に旋回して行った。

植物達は、風圧で揺れ動いていた。

(「神様は助けてくれない。」

の言葉はすんなりと誠の心に入った。

その通りだ、神様などいらないのだから。(

竹崎真一が、笑顔の後に言つた言葉。  
「自分で解決しなければならない。」

当たり前の事に、誠はハツとした。

竹崎の俊敏な行動、仕草、言葉から発つせられる気付きの言葉たち。

誠を導くように、竹崎真一は現れた。

昨日は、優しさに溢れたオーラが、誠を積極的な気持ちにした。

妙に竹崎真一の「神と浮浪者」という言葉の組み合せが、誠には同意語に感じたのだ。

(とりあえづ、行ってみよう。)

と昨晩、決心した。

誠は駅に降り立った。

一山越えた後にあるこの街は、前方を一面の田園風景が広がっていた。

初夏の陽光が、青く規律よく延びた稲に降り注ぎ、灼熱の照り返しの熱風を、蜃氣楼のように漂わせている。

その熱風の彼方に、町並みが揺れながら、存在していた。

誠は上着を肩に乗せながら、ゆっくりと、その田園の中を歩いて行つた。

## ファミリー

誠は汗を拭い、髪型を整えた。

大きな塀の壁が長く続き、その中央に株式会社 タケザキ と書かれた看板が建っていた。

大型トラックがゆうに2台は通れる門を誠は入つて行つた。

正面に工場が見える。

誠はその大きさに圧倒された。

工場前には大型トラックが五台停まっており、リフトでラッピングされたパレットを積んでいた。

敷地は、ちょっとした学校の運動場の広さはある。

その手前の右側に、レンガ模様の壁の、3階建ての綺麗な建物があつた。

「事務所」と書かれた看板が一階にあつた。

誠は気後れする気持ちを振り払い、呼び鈴を押した。

ガラス越しに見える、下足箱の上には、豪華な花瓶に活けられた生花が、色鮮やかに四方に伸びていた。

すると、自動ドアが開き、一人の女性が現れた。

地味な紺色の事務服を着ているが、誠に放った笑顔が美しかった。クリイム色の髪が腰まで伸びていて、華奢な身体ではあるが、ふくよかな胸、スラリと伸びた長い脚。

美人はこの世にはたくさんいる。

しかし、ここまで笑顔の美しさが、人の心を和ませる女性を、誠は知らなかつた。

少しお腹が膨らんでいる。

妊婦と分かつた。

(女性は身ごもると、ここまで優しくなれるんだ。)

誠は見とれてしまった。

女性は深々と笑顔を称え、お辞儀をすると、

「田中誠様ですね、当方の竹崎から伺つております。

暑かつたでしょう、さあ、お入り下さい。」

誠は再びハンカチで汗を拭つた。

たどり着いた安堵でいっぱいであつた。

事務所内の来客用の椅子に案内された。

事務所内を伺うと、五人の男女が忙しく仕事をこなしている。

誠が腰掛けるとすぐに全員が、「こんにちは。」

と声をかけてくれた。

誠は今までに、多くの会社を訪問して來た。

しかしこの人達の笑顔に勝る企業を、誠は挙げることは出来なかつた。

殺伐とした雰囲気がない。

全員が笑みを称え、各自が互いの仕事を手伝い、一つの連係するようなチームワークで仕事をしていた。

ここに仕事をやらされているという、強制は無いように感じられた。惰性や怠慢は見られなかつた。

生きた職場とはいつのものだと誠は思った。

それよりも竹崎といつての下に着くものは、いつも活かされるのだと、改めてその手腕に尊敬を抱いた。

先ほどの女性が冷たいお茶を運んでくれ、

「少々お待ち下さいね。」

と云ふと、社長室に向かった。

ガラスのついたての奥が社長室で、女性が

「田中様がお見えです。」

と言つた次には、

「おー、」

と社長室から飛び出すように現れた。

竹崎は誠に歩み寄りながら、

「場所は分かつたか！待つっていたよ、さあ。」  
と手を取るなり、社長室へと連れていった。

連れていった、といつより引きずつていったと言つたほうが当てはまつていた。

このテンポの速さに誠は好感を抱いた。

誠には無い行動力である。

好感は人間力としての魅力に変わり、憧れへと転化していく。

竹崎は社長室の真ん中にある応接テーブルのソファーに誠を促し、

正面に座り、満面の笑みを浮かべた。

瞳の奥に、優しさが溢れた笑顔であった。

「早速、誠君の使命なんだけど…」

竹崎は（使命）といつ言葉を使った。

「ちょっと待つて…」

竹崎は立ち上がる、

「アリサさん、冷たいのにして、あと冷えたオシボリもお願いします。」

と社長室のドアを開けたまま言った。

「はあい。」

と先ほどの女性が優しい口調で明るく返事をした。

この口調の裏側にあるほのぼのとした雰囲気からして、明るい職場であることが分かった。

すぐに冷たいお茶とオシボリが、先ほどの女性の手によつて運ばれて来た。

「あっ、誠君、紹介しようと、こちらはあと二ヶ月だけだけど、受付を手伝ってくれている井上亜利沙さんだ。」

「初めてまして、井上亜利沙です。」

頭を少し傾けながら笑顔で誠に深々と頭を下げた。

「」覧の通り、あと三ヶ月で臨月に入る、それまでの間、無理を言って手伝つてもらつているんだよ。

旦那さんを口説くのに苦労したよ。」

竹崎は大声で笑つた。

「誠君…」

竹崎は誠を直視すると、ニタツとした笑みを浮かべ、

「君を紹介した井上祐一君の奥さんだ。」

誠は気が動転した。

まさか、こんな事が…。

誠の妻の、前夫の再婚相手が、目の前に現れたのだ。

誠は運ばれてある、冷たいオシボリで顔から流れる汗を何度も拭いた。

しかし、竹崎は、その辺りの人間関係は知らない。

また亜利沙も、まさか目の前にいる男が、祐一の前妻の再婚相手などとは、夢にも思つてはいなかつた。

竹崎は、誠の驚きぶりを見逃さず、

「誠君、驚いただろう、井上祐一君が初めて訪ねて来た時に、亜利沙さんも同席していたんだ。

その時に、身じもついていて、会社を辞めたばかりだったんだけど、うちには募集広告は出さないからね。

それで手薄な事務を手伝つてもうひとつにしたんだ。」

誠は平静を装つたつもりだつたが、この竹崎の洞察力に、ビックリで平静を装えたか分からなかつた。

また本当の事をこの際、伝えよつとも思つたが、亜利沙の祐一との繋がりの深さを考えると、今日は告げないほうが良いと判断した。

「誠君、それとレディーの前でオシボリで顔を拭くのは、いかんよ。オジサンぽいつて嫌われるから、なあ、亜利沙さん。」  
「いつと体をのけ反らせて、大声を上げて笑つた。

亜利沙は、

「いえいえ、男性の汗は、女性にしてみればすごくセクシーですよ。」

と一人に笑みを与えながら退出した。

二人は再び対座した。

数秒の時間が流れた。

竹崎は目線を天井に向け、しばらくした後、ピターンっと両手でひざを叩いて、

「とりあえず、会社を案内しよう。

僕について来なさい。」

と言っている最中には席を立ち、誠を外へと促した。

事務所から出て、奥にある工場内に誠は案内された。

手前側の開閉式のドアの前には、「調理室」と書かれた標札があった。

誠は歩きながら、一回深呼吸をして心を落ち着かせた。

その工場の回りには、モルタル造りの垣根が囲んでいた。

垣根の中には晩春を彩る花々が、整然と花色ごとに咲き乱れていた。

誠の嗅覚に花々の優しい香りが心を和ませた。

花々の一本一本が、陽光の中で、一段と鮮やかに凛とした生命力を育んでいた。

誠は、その花々が、この中で働いている人々の象徴であるような気がしていた。

空には雲一つない晴天であった。

ドアを開け、中に入ると、ガラスケースで仕切られた棚が、数段に

分かれていた。

その棚の列には、一列に密封式の寸胴鍋が並べられていた。それらの寸胴鍋には、近郊の地域が書かれてあった。

その奥に、開閉式の扉があり、手前に消毒液とマスク、あと衛星帽が置いてあつた。

二人は入れる準備をすると、戸を開けた。

そこは調理場であった。

白衣を来た男女が十人ほど、忙しく仕込みの準備に追われていた。

皆、四十歳は超えている年配の人達で構成されていた。

竹崎に気づいた一人が、

「あっ、社長、おはようございます。」

と大声で言った。

すると全員が竹崎に向かい、

「社長、おはようございます。」

と、手を休め、一人一人が竹崎に対して握手を求めて來た。

「おう、今日も美味しそうな香りがしますね。」

と竹崎が言つと、とうに七十歳は超えていそうな、調理場で一番年配者であろう、瘦せて腰の少し曲がつた男が、すぐに合いの手を入れた。

「社長、任せて下さるよ、それよりも我々の仲間を一人残らず連れて来て下さいよ。」

竹崎は親指と人差し指で丸を作り、「了解。

それで今日は早速、我々の仲間を連れてきたんだ。

紹介するよ、田中誠さんだ。」

誠は困惑した。

ある程度は心は固まりつつあったが、まだ正式にここで働くとは決めていない。

雇用関係の具体的説明もまだされてはいなではないですか。

ただ自分がここに居るのは、竹崎真一という男に魅力を感じたことと、竹崎が言つた言葉に、その答えがどういうものか確認するためであった。

特に（浮浪者）の意味は何なのか、ということが一番聞きたかったことであった。

竹崎が誠を紹介した後、調理場の皆がお互い顔を見合させ、誠に言った。

「誠っちゃん、あんたスース買つのに前借りしたんかい？無理しなくていいんだよ。

ここでは着れれば何でもいいんだからね。」

年配の男がそつまつと、誠のところに歩み寄つて来て、握手を求めた。

「これも何かの縁だね、誠っちゃん、お互い頑張ろう。」

調理場の全員が歩みより、それぞれ名前を告げ、握手を交わした。

誠は思った。

この現場にも生き生きとを感じる。

竹崎といつ男から発せられるオーラが全てに生氣を吹きこんでいるだけだが、常に竹崎の身体からは光る輝きが出てこようである。

「皆、田中誠さんは（一般）なんだ、私に代わってスカウトで活躍してもらおうと思つんだ。」

「なに、（一般）かい！」

先程まで天ぷらを揚げていた、六十歳位の妙に顔が赤い小肥りで背が低い女が言った。

一同、一瞬困惑の表情になつたが、すぐに歓喜の表情へと移り、納得するように相槌を打つた。

「それは良いわ、今は六月だから、社長がいつも言われる通り、寒くなる十一月までが勝負だからね。」

誠つむぎやん、頑張つてや。」

と長老がいうと、それにつられてるよひみか、

「誠さん、頑張つて下さい。」

と合図のように調理場内に響き渡った。

「いやも、やりされてこるとこいつ義務が感じられない。

誠は、今までの見てきた多くの企業と比較して、ここまでの理想郷としての、従業員の意思疎通とやる気が、確立している会社を見た

ことがなかつた。

(彼らが手抜きを決してすることのない、顧客のターゲットはどの  
ような層なんだろうか。)

誠は考えていた。

あと、

「竹崎は自分の事を（一般）と呼んだが、その意味はなんだろうか。

」

竹崎は誠の肩を軽く叩きながら、外へと促した。

竹崎が片手を上げて、調理場から出ると、

長老が、

「 まあ、みんな頑張るべ。」

と言つと、皆一同に、

「あいよ。」

と返事が返つて来るのが、調理場を出ながら誠の耳に聞こえて來た。

誠は一種の高揚感をその言葉から与えられた。

誠は感動した。

調理場の外は、長い渡り廊下になつていた。

その向こうには、また大きく仕切られた工場の一画があつた。

長い渡り廊下が終わりに近づくにしたがつて、流れ作業にありそつな機械音が、リズミカルに徐々に大きく聞こえて來た。

扉を開けると、それぞれの機械から聞こえる音は、各自の工程に合つた響音を交えて、誠の身体を震わせた。

工場は二階建てになつており、竹崎は脇の階段から2階の事務室に誠を案内した。

中には十個ほどのデスクが並べてあつたが、誰もいなかつた。

しかし、その事務室の奥にガラス張りで隔てられたオフィスがあり、二十人ほどの若い男女が、電話応答に忙しく応えていた。

観ると電話は引っ切りなしに掛かつて来ているようだ。

しかし、ここの人達も、嫌な表情や惰性の心情がないように見て取れた。

竹崎は気付かれないように、前方にあるガラス壁に、誠を誘導した。

ここから工場全体が眺められた。

「誠君、どうかね、このような工場が今全国で四つある。今度、東北にもう一つ作ろうと思つている。」

「社長、一体なんの工場なんですか？」

観察すると、六つの工程で製品完成が成り立っている。

竹崎は誠に説明した。

まず二階から二力所、ベルトコンベアで一つは小さい植木鉢、もう一つはサボテンと盆栽が運ばれる。

それぞれのコンベアは交差する機械の中で、鉢の中にサボテンと盆

裁が綺麗に植えられて、手前側のコンベアに乗せられる。

そこで数人が検品作業をする。

すると綺麗に植えられた鉢達は、別の機械の中に運ばれて、鉢の回りにアクリル製のポケットみたいなものを貼付けられ、コンベアで流れた先には白い封筒を収める人達が、素早くそのアクリルのポケットの中に入れている。

また検品があり、また機械の中に運ばれて、また検品。

最後にアクリルの真ん中に取り付けられたボタンからは曲が流れ、それを確認して、あとはパレットに重ねての出荷作業という工程である。

竹崎が誠に説明する表情には、常に製品を慈しむ表情があり、かつその持ち場を任せている従業員への感謝の気持ちを事細かに説明した。

「それで、あの封筒に送る人への想いを書いてもらつんだ。完全防水だから手紙は濡れないんだ。」

竹崎は誠に目をやると、微笑んで続けた。

「そしてタイマーがセットされていて、送る人は手紙を開けてもらいたい日時を指定出来るんだ。

サボテンと盆栽は寿命が長いからね。」

誠は夢物語を聞かされている感覚であった。

手紙を添えたプレゼントは、どこにあるが、読んでもらえる日を

指定出来るなんていう話は聞いたことがなかった。

「夢の商品ですね。」

誠は率直な感想を述べた。

「やうだう。」

「コラと笑うと誠の肩を優しく叩いた。

休憩の時間を知らせるチャイムが鳴った。

「階に紹介するよ、さあ。」

といつと一階に誠を導いた。

先程の調理場のスタッフは、比較的年配の男女構成であった。

しかしこの工場内は、下は十代と思える男女から、上は六十を明らかに超えているだろう男女が、均等に配置されていた。

総勢七、八十人はいた。

やはりここでも、人間の心の奥底にある、性悪なものや、邪悪なものは感じられない。

観ると、数分の休憩の終わりを告げるチャイムの時間まで、お互い同士、言葉を掛け合い励ましあっていた。

竹崎がチャイムと同時に、マイクを握ると、社長の存在に気づいた全員が、

「あつ、社長！」

と、階まるで父親が兄弟を見るように注目した。

竹崎は先程、調理場で話したように、誠を紹介した。

やはり誠は（一般）であった。

そして（スカウト）で拍手が起きた。

この会社は夢が、従業員を動かしていると誠は確信した。

「IJJにあるかも知れない。」

と誠の心に直感が走った。

「善を持って成せといつ」と……？

と内なる何かが、誠に言添えた。

「IJJの職場の希望は…本物だ。」

誠の直感は確信に入った。

「使命とは…？」

竹崎が言った言葉が心を支配した。

「やうやくねば…！」

心が固まった。

従業員達の拍手は鳴り止まなかつた。

## カリスマ

竹崎と誠は社長室に戻った。

その日、その年初めての冷房が稼動された。

六月の陽光は灼熱のたぎる時間を超え、徐々に優しさを包む姿に変えつつあつた。

テーブルに対座する一人に、窓の陽避けのブラインドの隙間から、陽光は斜めに侵入し、中央にあるテーブルまで忍び込んでいた。

「誠君、まあ、ざつとではあるがこれがタケザキという会社の一部だ。」

竹崎は置かれた冷たいウーロン茶を飲み込むと、背中をソファーに寄りかけながら、誠に微笑んだ。

「」の他に植物の農園が、全国で十五箇所、今、見てもらった製品工場が、北海道、関東、近畿、九州と四箇所。それで今度、東北に新たに製品工場を作る計画なんだ。」

竹崎はゼスチャーを交えて、まるで子供のような高揚ある抑揚した声で話す。

「あとは運送部門、調理部門がある。  
本社は東京の銀座だ。」

とこうと自らのデスクの上に置かれた、小さい箱を誠に持つて来た。

「君が来たらすぐに作ってくれ、と事務さんに作らせたものだ。すぐに使って構わない。」

竹崎はその箱を誠の目の前に置いた。

「行く行くは、この名刺が役立つ時が来るだろ？。」

名刺を開けると、こう書かれてあった。

株式会社 サコーズ  
会長秘書室  
マネージャー  
田中 誠

誠は最初、この名刺の意味を理解できなかつた。

株式会社 サコーズは、誠の前会社などではとても相手してくれない急成長を遂げている会社である。  
一部上場企業で常にプラスチックマーケティング部門では、利益率が日本でトップの会社である。

会長？秘書室？

頭が混乱した。

「誠君、このタケザキ以外にもう一つ私は会社を持っているのだ。」  
竹崎はゆつくりと、作業服の内ポケットから名刺入れを取り出して、誠に名刺を渡した。

それにはこう書いてあつた。

株式会社 サコーズ

代表取締役会長

竹崎 真一

誠は竹崎を見つめた。

昨日から誠の運命は激動しだした。

それはあの公園で、竹崎と会つてからである。

誠は腰が砕けそうになるほど、驚愕した。

あのカリスマの企業のトップが、田の前にいるのだ。

激動を与えられた誠の心の許容範囲を、竹崎という男が超えさせた。

誠は身体が震えるのを懸命にこらえた。

サコーズの現社長は、三島一馬という五十八の初老の男である。  
その社長交代は突然であった。

五年前、当時四十五歳であつた社長の竹崎真一は、自らが育てあげた、サコーズの一歩上場を機会に、社長を退くと宣言した。

当時、サコーズはプラスチック加工業で、世界標準の特許権を次々と取得し、世界からも注文が殺到するという昇竜の企業の、突然の社長交代である。

経済界はもちろん、多くのマスコミの注目となつた。

当時、専務取締役であつた実弟の竹崎洋一が、エスカレーター式に社長就任となると、誰もが思っていた。

しかし竹崎は、三島一馬という中途入社の、取締役としては末席の営業所長を、十人抜きで抜擢した。

社長退任の記者会見から、わずか三日後の早業であった。

その時の日本は、ある意味で何も変わりのない平凡な日常が続く、考えれば至上の幸せが続く日々であった。

話題のないマスコミは、この交代劇に飛びついた。

新社長の初老の三島一馬を、苦労人の遅咲きのシンデレラボーイと崇めた。

返す刀の矛先として、崇拜の慰め役としてマスコミは、有りもしない、骨肉の争いと表題した、実弟の竹崎洋一を登場させた。

後の良識ある論調によると、新社長発表までの三日間は、信頼する弟を納得させるため、兄は涙で説明し、納得させたという。もちろん、断り続けた三島に対しても一緒に事をした。

現在は、専務取締役である竹崎洋一は、社長の三島一馬を助け、二人三脚でその業績は年を重ねる毎に上向いている。

気に入らないのは、飛び越えられた取締役たちである。しかし、社長の竹崎真一は臨時取締役会議で言い放った。

「この人事に不満の方は、1時間以内で辞表を提出して下さい。」  
社長の言は鋭かつた。

顔は普段の穏便から、鬼の血相だったといふ。

一同はその迫力に愛想笑いを浮かべるしか無かつた。

就任会見は、さうじに庄巻であつた。

経団連会館で行われた会見は、関係省庁、並びに各マスコミが整えたテーブルに、真ん中に新会長の竹崎真一、右に新社長の三島一馬、左には専務取締役の実弟である竹崎洋一が座つた。

新会長の竹崎真一は、始終笑顔は見せなかつた。

不機嫌に下を見つめていた。

会見は新社長の三島一馬が仕切つた。

昨日までとは全く違つ世界に放り込まれた環境の中で、新社長は理想どビジョンを、皆にわかりやすく、かつ、意地悪な質問にも丁寧に応えた。

会見が終盤に差し迫り、マスコミは会長に対し、最もこの人に對して、聞きづらい質問をしなければならない時が迫つていた。

皆、竹崎真一の迫力に押されていた。

一人の若いマスコミ関係の男が、勇気を絞つて言つた。

「お聞き難い質問ですが、新会長にお尋ねいたします。」

会場は息を呑んだ。

「普通は同族であります専務取締役の竹崎洋一さんを、新社長と考えると思うのですが、それをあえて今回の人事に踏み込んだ理由はどうあたりにあつたのでしょうか?」

カメラのフラッシュ音がこの時集中した。

その言葉を受けた新会長は、今まで下に向けていた顔を上げた。睨みつけるように、鋭い眼光がその記者に注がれた。記者たちは、そのオーラに一瞬身を引いた。

その一瞬の、睨んだ写真をマスコミは後に好んでメディアに使った。

新会長はマスコミ報道陣を睨みつけた。

そして、ゆっくり睨みつけたまま、立ち上がって言った。

シャッターは連続撮影でフラッシュを切っていた。

「君達の常識はそんなものかね？」

竹崎真一はテーブルに両手を着き、記者たちを右から左に睨みつけた。

シャッター音は止まり、皆その表情にたじろいだ。

その時、初めて竹崎真一は笑みを浮かべ、大声で笑った後、大声で言った。

「何の事はない、簡単な事です。」

竹崎真一はもう一度、記者たちを見回した。

そして隣に座している、実弟の専務取締役の竹崎洋一に眼を向けて言った。

「弟はまだ若い、経験がまだ足りない。」

竹崎真一は反対に座す新社長の三島一馬を見て、

「その点、新社長の三島さんは苦労を重ねた思いやりの人物である。対人に対する気配りが出来る人である。

私はそういう人に社長になつてもらいたいだけだ。

以上。」

簡潔な応えであった。

記者たちは何も返す言葉が出なかつた。

その場で壇上の三人は、固い握手を交わした。  
各自とも、表情が柔軟になつた。

会場は拍手喝采に包まれた。

シャッター音が、その中に凄まじい光と共にたかれた。

「これで会見はよろしいかな？」

新会長の竹崎真一が言つた。

「会長、最後に一言お願ひします。」

一人の記者が言つた。

「おいやい、まだあるのかよ、執事いね。」

おどけるように新会長が言つと、壇上の三人はもちろん、会場全体  
が声を上げて笑つた。

それまで会場の空氣は、張り詰めた冷氣が漂つ、暗雲漂つた空のよ  
うであったが、竹崎のこの一言で、一瞬に夏の晴天の青空の下に導  
きだされたような雰囲気になつた。

竹崎真一は、そのようなオーラを持っていた。

「すみません。

会長は退任された後のスタンスは、経営とは一切係わらないとの事ですが、何か別の事をお考えですか？」

「君、嫌な事を聞くね。」

竹崎真一は笑って応えた。

会場はまた笑いが溢れた。

「新社長と専務にお願いして、系列会社を作つてもううとう。」「えつ」

記者たちは再び沸き返つた。

竹崎はそれを制止するよつて、「いやいや、すぐにはな」とよ。

皆さんが困つた時に出てきますから。」

竹崎真一は笑つて言つた。

「では、これにて。新サコーズをよろしくお願ひします。」

と言つて会見は終つた。

誠はその事を思い出した。

新聞や雑誌で、凜とした淵みで写っていた写真を思い出した。

そして田の前に、その時の淵みなじまるでない、柔軟な竹崎真一がいるのである。

誠は、動搖する心を振り払うように立ち上がった。

「サコーズの会長様とは知らず、大変失礼致しました。」

と言つて深々と頭を下げた。

数秒の後に、誠は恐る恐る、頭を上げた。

すると竹崎はポカーンとした表情をしていた。

そこには凛として睨みを効かせた、写真のような男の姿は無く、中年の作業服を着た、どこにでもいそうな気の良い工員が、不思議そうに誠を見ていた。

「へえ、誠君、サコーズっていう会社、知つてんの？」

誠は眞面目である。

多少の冗談と演技で逆に、誠の気持ちを落ち着かせてあげようとした竹崎の演技であつたが、誠はその、誰でも答えられるであろう質問に、バカ正直に応えた。

「会長、何をおっしゃるんですか。

少なくともビジネスマンで、サコーズを知らない者はいません。

最近はオリジナルのキャラクターなどがコマーシャルで人気を博しておりますし、小学生でも知っています。」

「へえ、そうなの？

バカな前社長が居なくなつてから、そんな事もやつているんだ。」

竹崎は身体を揺すりながら、大声で笑つた。

「…会長、決してそんなことは…」

「誠君、光が眩しいね、ちょっと待つて。」

竹崎は立ち上ると、窓辺の方向に向かいながら言つた。

「へえ、僕よりも詳しいね。」

「いえ、会長の前だから言つ訳ではありませんが、サコーズが日本より海外で評価されていることが特に特出される所だと思います。」

竹崎はゆっくりとブラインドを上げながら笑顔で応えた。  
誠は続けた。

「まず、一般的にはアメリカ始め、ヨーロッパ各国の先進国と取り引きしようとするのが通例です。  
しかしさ「ゴーズは違いました。  
東南アジア、アフリカの途上国を重点的に取り引きを始めました。  
僕はその気概だけでもすごいと思いました。」

竹崎はブラインドを半分まで上げた。  
そして誠の方を振り返って、

「ほう、最高のお褒めの言葉、ありがとうございます。」  
竹崎は大きく一礼した。  
そして大声を出して笑った。  
そこには確信という喜びが入った分、普段の笑い声よりも大きかつた。

(二)の男は出来る!  
核心を突いている。

考えてみれば何百人もいるどの社員も、先進国との事ばかりを私に進言して、途上国の事はおざなりにした態度であった。  
先進国など、私が行かなくても勝手に生き延びる。  
しかし、企業としてもそつだが、人として心を傾注しなければいけのは、弱い立場の人々を手助けすることなのだ。

これで一人目だな、途上国に着目した男は。）

竹崎は心中で、計画の半分が達成したと思った。

欠点は真面目すぎる」とだが、これは毎日のミーティングでなんとかなる！

竹崎は結果の模様を頭に描いた。

ちなみにそのもう一人の、途上国に着目した男とは、サコーズの現社長である三浦一馬である。

## 決断

「まあ、誠君、座つて。」

竹崎は、窓から見える景色を眺めながら言った。

会社の敷地には、芝生が広がり、その真ん中に、青々と繁った葉を持つ大木が、一列に、一定の間隔を保つて、並んでいた。

陽光が部屋一面に入り込んでいた。

誠の視界から見える竹崎を、陽光はすっぽりと入るよつに照らしていた。

竹崎の全身が、陽光の輪の中に入っていた。

その輪は、得体の知れない、尊厳なものに誠は感じた。

それは、見ていけない封印された絵画、とでもいうような尊厳なものようであった。

長い竹崎の影が、座つた誠を覆い隠していた。

竹崎はブラインドを下ろした。

陽光が遮られた瞬間、竹崎の皮膚から放たれていた光りの蒸氣も遮断され、輪郭が元に戻された。

誠は、夢を見ている感覚から覺醒した。

竹崎は席に着くと、誠に尋ねた。

「誠くん、先程うちの従業員を紹介しましたが、その人達の前職は、何だと思いますか？」

「前職ですか？」

「そうです。」

誠は意表をつかれた。

考へてもいなかつた質問である。

誠は”試されているのか”と不安になつた。

先程の人達の顔を思い浮かべてみた。

まず全員が優しい。

そして仕事に対しても、一生懸命である。

ということは（愛社精神）が、他社が真似できないレベルにある。

それと竹崎は

「うちは募集広告はかけない。」

と先程言つていた。

これにより、サコーズから回つて来た人達であることは分かつた。しかし、一律に（前職）と聞かれても分かるはずなかつた。

誠は答えを導くヒントを探したが、その解答を引き寄せる、みち糸すら見出だせなかつた。

明確な答えを搜せば搜すほど、糸の先端の点すら逃げて行つた。

「誠君、意地悪な質問だつたね。

すまん。」

「というと、体を前のめりにして、誠に近づいた。

「誠君、私はあの人達を尊敬しています。  
もちろん愛しています。」

「は、はい。」

誠は答える義務が無くなつたことに安堵した。

「あの人達の、前の姿になる経緯は人それぞれです。」

竹崎は誠の目を凝視して言つた。

その目が、凝縮された哀れみに変わつた。

「倒産した中小企業の経営者、無念にも借金を背負つた人、最愛の方を亡くして精神的に参つた方など。

人生の経緯の中で、そうなつた過程は様々です。

また、今の世の中、誰でもそうなる可能性を秘めている。」

突然、窓の外の大木の枝の繁みから、鳥たちが  
バタバタッと飛び立つてこちらに向かつてきた。

そして鳥達の影達は、竹崎の背中に吸い込まれてから、まるで彗星  
のように一団となつて、昇天して行つた。

「誠君、あの人達は……」

「はい。」

「全員、無職。」

「…はい？」

「全員、浮浪者だつたんだ。」

「…浮浪者！」

「ホームレスだよ。」

…なんという事か。

誠はもう一度、先程の人達の顔を記憶の中に呼び出した。

（俺は甘ちやんだ。まだ住む家があるうちから、心が砕けている。  
調理場の長老の曲がった腰には、どれだけの壯絶な人生があつたら  
うか！）

揚げ場の小肥りのおばさんの赤ら顔に、想像もつかない秘密がある  
のだろうに…）

誠は恥ずかしくなった。

しかし、それはすぐに消えた。

その変わりに、身体の芯から熱いものが湧きだし、体内に何かが充  
満したのを覚えた。

それは使命感であった。

「驚いたかな？」

「……はい、正直、驚きました。」

「嫌になつたかね？」

竹崎は悲しい表情を作つた。

「いえ、逆です。」

誠の返事には数秒の間も無かつた。

その応えの後、竹崎の目が潤んでいく時間は、秒単位に深くなつて行つた。

「だから僕は”一般”なんですね」

「ははは、そなうなんだ、誠君とアリサさんが”一般”だ。」

「で僕がホームレスの人をスカウトするんですね。」

「やつてくれるか？」

「もちろんです。」

「これは仕事とつぱり、人間の使命感に近いものがあるから、苦しこよ。」

「腹は決まりました。」

「まだ誰も歩んだ事の無い道だよ、マニユアルなんて物は無いんだよ。」

「大丈夫です。」

「彼等の中に入るから、ホームレスになつてもうつよ。」

「会長、すでに僕の心はホームレスですから。」

「おう、そうか！」

二人は笑つた。

徐々にそれは大きくなつた。

社長室の外からも、クスクスと押し殺したような笑い声が聞こえた。

二人は立ち上がり、握手を交わした。

竹崎は強く握り絞めた。

誠もそれに応えた。

竹崎は誠の両肩に手をやり、言った。

「愛を持つて助けよう。」

「はい。」

誠は力強く応えた。

陽光が一人を祝福するように、影を一つのものとしていた。

二人はすぐに打ち合わせに入つた。

「誠君、マニュアルは無い。」

だから君が作つて行く訳だ。

じゃ、私の意向をこれから話す。」

竹崎の表情は険しくなり、氣のいい工員から経営者の顔へと変貌した。

妥協という脆弱な温室の果実ではなく、自然の風雪の産物である流氷のように、厳しい表情であった。

竹崎は誠の前に、すでに竹崎本人が作つていた計画書を出して説明した。

「まず、世間が見捨てた人々に再起の機会を与える。

動機は政治屋が動かなければ、我々民間が動く。

ちなみに私は政治家とは、あいつらの事を言わないから承知してくれたまえ。

コンセプトは、”愛を持って人を救う”だ。

次に第一次カウト期間を12月までとする。

要は冬までに生きる意思がある人達を全員救う事、家の無い人々がどうやって厳しい冬を生き延びられるかね？

竹崎は時々、計画書の紙面には無い、本人の感情も話しながら、進めて行つた。

次にスカウト条件は基本、誠君に一任するが、私の意向は”生きる意思のあるもの”。

誠君は銀座のサコーズの本社に出社して、調理部が作った弁当をホームレスの人達に届け、本社に専用室を設けるから、毎日私に連絡

する」と。

すでに向ひの役員には連絡済みだ。

当座の資金として、明日、二千万円振り込む。半分、給料とし、残りはスカウトの資金として使ってくれ。

第一期は、また別に振り込む以上。」

「まあ、こんなものかな?」

表情が元に戻り、誠を見つめて微笑んだ。

「会長、報酬は一千万ですか!」

「ダメか?

第一期がそれだから、二期分も含めると一千万だが……少ないかな?」

誠は恐縮した。

「いや、あまりに多いので驚きました。」

竹崎は大声を上げて笑った。

「ろくな仕事もしない政治屋たちが、いくらもらつていると思つんだい! それに比べたら安いもんだ! もちろん昇給はして行くよ。君は馬鹿正直だな!」

と言つと、先程以上の厳しい顔で、

「これは仕事を超越した”使命”なんだ。

君は、もうすぐ人々から”こじき”扱いされる。

また夏は酷暑の中、冬は吹雪の中、彼等の生活の中に入らねばならない。

どこに愛する社員を、そのような地獄の中に放り出す馬鹿社長がいるかね？」

竹崎は誠の肩を優しく叩くと、自らの肩を震わせ、号泣した。

徐々に陽光は赤く染まりかけていて、一人を優しく染めていた。

誠はこの人のためという、二つの使命感を心に強く刻んだ。

誠ももちろん号泣した。

その後、ミーティングは夕方の日の暮れる寸前まで続いた。

二人のいる室には、落日の熟成された陽光が、華麗に充満しており、熟考の会話の余韻に相まって、二人の頬を赤くメーキングしていた。は薄青く、徐々に星座を煌めかせつた。

「じゃ、明日からスタートしよう。」「承知致しました。」

再度、二人は握手した。

メーリングされた頬に、安堵の微笑みが加わった。

「ところで誠君、明日から当分、家を空けることになるが、奥さんはいいとして、子供さんは大丈夫か？」

「大丈夫です。

妻は社長で、十分に余裕はあります。」

「そうか、今日はたっぷりと娘さん孝行をしなきゃね。」

「ありがとうございます。」

竹崎はデスクに置かれた封筒の束を持って来て言った。

「誠君、この封筒は今日届いた、お客様からのものだ。

だいたい一日に二十から多い時には百通も来るときもある。中にはクレームもあるが、ほとんどがお礼の手紙だ。

「ピーするから読んどいてくれたまえ。読めば總てが分かるよ。」

「わかりました。」

誠が竹崎と固い握手をして、会社を出たときには、日が暮れかかり、夜の闇はまだ未熟であった。

竹崎の計らいで、タクシーで帰った。

その頃には、空には、やいめく夏の星座が鮮やかに輝き、闇は成熟へと向かっていた。

家に着くと、妻である真由美とリサが、食事を取つていた。

前もつて、面接で遅くなるといつことを、誠は真由美に伝えていた。

真由美は名田は社長であるが、今では決定前までの仕事は全部、部下が遂行していた。

真由美は企画の提案と、それらを決定する印鑑を押すだけであった。

よつて真由美は気ままに、一人旅をしたりして家を空ける事もしばしばであった。

誠がいなくなつた後、リサの面倒を見る時間は、いつでも作れるのだ。

テレビの音しかしないダイニングを開けると、リサは誠の顔を見るなり、駆け寄つて来て、抱き着いて來た。

「お帰り、おじさん！」

「ただいま、リサちゃん。

今日はおじさん、お迎え出来なくてごめんね。」

誠は、頭を撫でながら言った。

「うん、大丈夫だつたよ、今日はママが、お家にいてくれたのー。」

真由美は振り向きもせずに、箸を口に運んでいた。

「そこにあるあなたの分がありますから、よそつて食べてください。  
それと今月分のお小遣い、靴箱の上に置ことりますから。」

真由美は食べかけの茶碗を流しに持つて行き、リビングを後にしようとしました。

「この間、誠を見ることとは無かつた。」

「仕事が決まったよ。」

今から出張に行つてくる、帰りは何ヶ月後になるか分からない、リサを頼む。」

誠は背中越しに真由美に言うと、リサを席に戻し、

「おじさんはしばらく帰れないけど、お利口さんにしているんだよ。」

「リサに言つと、口をへの字にして、

「早く帰つて来てね。」

としたを向いて悲しい表情をした。

真由美はドアに掛かつた手を離し、腕組みをしながら振り向き、誠を見て言つた。

「会社の名前は？肩書きは？」

矢継ぎ早に質問した。

もし俺が、一流企業の会長室のマネージャーとでも言つたら、この女はどうなリアクションを興すのだろうか？

「タケザキという小さな会社の人事担当だ、役職はない。」

真由美は呆れたように下を向いて、そして深いため息を一つついた。数秒たつて、顔を上げて言つた。

「お給料の事は聞かないわ…」

まあ、頑張つて下さい。」

と言つと、ドアを大きな音を出して、出て行つた。

誠は考えた。

真由美は誰が見ても美人である。

そのふくよかな体には、女としての妖艶なフェロモンが常に排出されているように、いつ会つても油断を許さない”備えられた美”がある。

顔が小さく、等身に換算すればハ以上はあり、その彫りの深い目鼻立ちから、エキゾチックな雰囲気を漂わせる。

しかし、今日会つた、調理場の小肥りの女性の”赤ら顔”とどちらが魅力的な人間か、と尋ねられたとしたら、今は迷わずに後者であると、自信を持つて答えられた。

誠は、リサと一緒に食事をし、風呂に入つた。

そして一緒に話題、ゲームで遊んだ。  
一緒に考え、そしてたくさん笑つた。

時間はあつという間に過ぎ、リサをベッドに寝かせた。

誠はリサの寝顔を眺め、将来に祈つた。

「心ある女性になるんだよ。」

誠はバックに詰められるだけの下着と、竹崎からもらった資料だけ詰め込んで、ジーパンと長袖のワイシャツ、それと白いテニス帽子を被つて家を出た。

闇は成熟しており、日中の陽光の熱は、人々が快適にある分だけ残し、天上へと帰っていた。

天は、夏の星座が支配していた。

それは駅まで向かう誠の足元を、街灯と共に照らしていた。

道すがら、窓辺の向こうから、親子、夫婦の会話や笑い声が聞こえて来る。

それは明かりの数だけ聞こえて来た。

誠は駅の前で、深く深呼吸をした。

晩春の凜とした空気が体中に、また心全体に染み渡った。

誠は自らに語りかけるように、心の中で呟いた。

「私に与えられた使命だ。」

その夜、誠は都心近くの下町の安いビジネスホテルに宿を取つた。

部屋は和室になつており、入ると四畳半の畳みの真ん中に、布団がすでに敷かれてあつた。

誠は全裸になつた。

毛布を剥ぎ取り、身体に巻き付けてみた。

「しばらぐは、この感触ともサヨナラだな。」

慈しむように、頬で感触を確かめた。

陽光の臭いがした。

それは、生まれた時から嗅ぎつけた臭いであり、どの人生のステージに於いても、自然から『えられ続けた温もりであつた。

「当たり前の中に入つている、自然からの贈り物。」

切羽詰まらなければ分からぬ、自然からの賜物。

誠は思つた。

死ぬ前に嗅ぎたい臭いは?  
と聞かれたら、なんの躊躇もなく

「田に干された布団の臭い。」

と答えるだらうと。  
確信した。

誠は竹崎から渡された、お客からの手紙のコピーを、鞄から取り出  
した。

最初は布団の臭いと共に、布団の中に包まつて読んでいた。  
しかし、一通目の後半からは、知らないうちに正座をしていた。

剥き出しになつたモモの上に、大量の涙が流れ、モモを伝つて敷布  
に流れて行つた。

時は静かに過ぎ、誠の啜り泣きを、深夜の凜とした空気が、吸収し  
て行つた。

宿の外では酔っ払い達が騒いでいた。

手紙・一

突然のお便り、失礼致します。

私は先日、夫をガンで亡くしたものです。

私が二十歳の時、二つ上の夫と結婚をして、そろそろ金婚式（五十  
年目）を迎える前の、夫の他界でした。

夫は無口でした。

これといって何も取り柄もなく、定年を迎えた後も、嘱託として長年仕事一筋に頑張った人でした。

そんな矢先、夫はガンに侵されました。

苦しい闘病生活のそんな中、去年の私の誕生日に、夫から小さな、盆栽の鉢をプレゼントされました。

「これ！」

と言つて渡されただけですが、初めての夫からの贈り物で、とつても嬉しかつたです。

その時には、ガンは末期でした。

三ヶ月後、夫は息を引き取りました。

最後は苦しみを伴つていましたので、その喘ぎ声のうちに他界しました。

最後の言葉は聞き取れませんでした。

夫を失つてからの生活は、あの人の笑顔や仕種を回顧しながら日々。私も早く向こうに行きたいといつぱいでした。

そんな寂しい日々を送つていたある日。

あの奇跡の日を、私は向かえました。  
私に生きる希望を与えてくれた日。

それは、生きていれば、金婚式の当日でした。

朝食を済ませて、一人でお茶を飲んでいました。

午前八時でした。

いつも夫が出勤する時間でした。

そうしますと、突然リビングの窓辺の方から、夫の声が聞こえて来  
たんです。

窓辺には生前、夫からプレゼントされた盆栽の鉢植えしか置いてま  
せんでした。

夫は私の名前を呼びながら、

「 子、今までありがとう。」

と繰り返しているんです。

驚いて鉢を見ますと、横の膨らんだ所の先端が開いていて、中に封  
筒が入っているではないですか！

その封筒を取り出すると、録音は止みました。

恐る恐る、また封筒を戻すと、懐かしい夫の声がまた再生されまし  
た。

私は咄嗟に、

「 あなた！」

と叫び、涙が溢れました。

封書の宛先には、私の名前が書いてありました。

裏には夫の名前が書いてありました。

私は涙で濡れた手でハサミを使い、綺麗に封筒を切つて、中を開きました。

中には夫が生前書いた手紙が入つてました。

こつ書いてありました。

それもある人の字で。

「 子、金婚式ありがとうございます。」

そして、今までありがとうございました。」

夫らしい短い文章でした。

タケザキ様

この度は、このような素敵なお手紙をありがとうございます。

寂しくなつたら今では、あの人の声をいつでも聞けます。

あまりにうれしく、どうしてもお礼の一言を申し上げたく、一筆しました。

これからもどうか、皆様へ夢をお与え続けますこと、  
お祈り申し上げましてお礼とさせていただきます。

- 札幌市より -

誠は次の封筒を開いた。

## 手紙、一

手紙、二

どうしてもお礼が言いたくてお手紙します。

僕は住み込みで料理の修業をしていました。

僕は中学の時にぐれでいて、親に迷惑をかけてしまいました。

就職も、父が頼み込んで、やっと許可してもらひった日本料理店でした。

料理の修業はつらく、僕はいつも店の寮を逃げ出す事しか考えていませんでした。

入店して二ヶ月後の僕の十六才の誕生日の日、突然両親が店にやってきました。

近くまで来たついで、とだけ言ってすぐに帰つてしましました。

その時に、

「この店にずっと根付くよ。」  
「

と、サボテンの鉢をプレゼントにもらいました。

その日、親方が僕を呼んで話してくれました。

「、『親は本当はお前を抱きしめたかったろうな。  
なぜ、早く帰ったか分かるか？』

お前の心が折れるのを心配だつたんだ。

優しい言葉をかければ、お前は親に甘えて家に帰るだらう、と心配したんだ。

今は辛抱するか、逃げるかの境目だ。

ご両親、最後に、

「よろしくお願ひします。

と言つて泣いていたぞ！

来年、一人を招待する気持ちでやつてみろ！」

僕は部屋に戻つて、両親の気持ちを思つて泣きました。

それから僕は、一生懸命頑張つて修業しました。

そんなんある日、突然母が死にました。

交通事故でした。

言えないほど、悲しかつたです。

絶対に俺の料理を食べさせてあげるという夢が、半分失くなりました。

僕の十七歳の誕生日が来ました。

親方のご好意で、父を店に招待出来ました。

僕の夢が叶う日。

僕は前日から、心を込めて父のために仕込みを始めました。

その時、親方から、

「バカヤロー！

お二人様分だろうが！

と怒鳴られました。」

その時は（無駄なのにな？）としか思いませんでした。

当田、父は僕に、

「去年送ったサボテンの鉢を俺の横に置いてくれ。」

と言いました。

腕を振るつた会席料理が始まりました。

水菓子を、そしておしごりと日本茶を出し終え、僕の夢が果たされました。

と、その時、

父の横にあるサボテンの鉢から、

「君、お誕生日おめでとう。」

と父と母が一緒に言つてくれているのです。

それも繰り返し、繰り返し。

父は俯いて、大粒の涙を流していました。

僕は何が起きたか分かりませんでした。

すると父が、

「封筒が二つ入っているから、後で見なさい。」

と言いました。

父は親方に、まるで頭を床に付けるかのようにしてお礼を言い、喜んで帰つていきました。

その夜、僕は封筒を開ける前までは、喜びよりも、失敗せずにやり

遂げた達成感の方が強かったです。

それから、ゆっくりと封筒を手にしました。  
そこには父からと、母からのそれぞれのボールペンで書かれた手紙  
でした。

去年の誕生日前に書いてくれていたものでした。

今は「お母の手紙には、こう書かれていました。

「ちゃん、今日のお料理、とっても美味しかったわよ、世界一。

」

父も、

「美味しかったよ。」

と書いてくれてました。

父も母も、去年から今日の事を見越して書いてくれていたんです。

涙が溢れました。

そして思いました。

「なんて俺は馬鹿なんだろ!うー!

親の気持ちも分からずにグレやがつてー!」

そしてすぐに気付きました。

親方の  
「一人分」  
の意味が!

タケザキ様

この度は、父と母に最高の親孝行が出来ました。  
この恩は一生忘れません。

本当にありがとうございました。

-福岡市-

その後、誠は残り全部の手紙を読んだ。

それにはどれにも感謝の言葉と、それに至つたそれぞれの人生が書かれてあつた。

誠は「タケザキ」で働く従業員達の、愛社精神、勤勉、熱意などを新ためて理解した。

「もう一人では泣くまい。」

誠は心に誓つた。

「全員で感動の涙を流すまでは。」

夜の闇は、最高の暗闇を過ぎ、徐々に朝の明るさを増しつつあつた。

## 誠に入った夢

その夜、誠に記憶に残らない夢が入った。

夢の主は、ベッドに横たわっていた。

口に酸素吸入機が付けられていた。

口に入る空氣は、冷たい水分を多く含んでいた。

回りには沢山の機具があり、それぞれが甲高いセンサー音を響かせていた。

夢の主は、横に少年が立っているのを見つけた。

その少年は、泣きじやくつていた。

黄色い帽子を被り、幼稚園の制服を着ていて、胸に「井上祐一」と書かれた名札をしていた。

涙がポタポタと、黄色いバッグに落ちていた。

(あっ、お兄ちゃんだ。)

僕はなぜ、起き上がれないの？

今すぐにでも、お兄ちゃんと遊びたいのにー。)

と思つた瞬間、夢の主は、その現場を斜め上の空間から見ていた。

センサー音も、急に足の下に移動した。

横にいたお兄ちゃんも、下に行ってしまった。

しかしごとに、夢の主は、魂が横たわった肉体から飛び出して、宙に浮いている事を理解した。

お兄ちゃんの後ろで、抱き合つパパとママが見えた。

一人とも泣いていて、パパがママを抱きしめていた。

(パパ、ママ、お兄ちゃん！僕はここにいるよー。)

と夢の主が田から叫んだが、聞こえていないようだ。

すると白衣を来た男が入つて来て、そのままでの夢の主を、じりくりと触つていった。

しばらくして、ゆっくりと、口に嵌められた酸素吸入機を外した。

そして手を合わせて、頭を下げるとい、部屋から出て行つた。

高みから見ていた、夢の主は、何度も何度も家族に叫んだ。

突然、目を開けていられないほど、眩しい光りの世界が現れた。

その光りは総ての空間を支配した。

夢の主の回つも、光りの世界に覆われた。

すると、先ほどまで下に見えていたものが、幻影のように消えようとしていた。

夢の主は、パパ、ママ、お兄ちゃんが、段々と平面の写真のようになつて、小さくなり、そしてとうとう、点の中に吸い込まれて行ったのを、悲しく確認した。

光りの源は、一本の木であった。

その輝く木の前に、一人の真っ白な一重の服を着た男が、ひざまづいていた。

その男も少しばかりの光りを放っていた。

夢の主は、男のすぐ後ろにいた。

「サンチエス、あなたの魂を向上させます。

あなたには、蘇生した後、また数多くの苦難が待つてます。」

と輝く木が言った。

すると輝く木、サンチエスと呼ばれた男、夢の主を、覆う透明な球体の輪が出来た。

それからその輪の外で、黒色、灰色、白色の無数の玉が現れ、透明な球体の輪にぶつかって、割れて行つた。

中から、人間の型をした裸体者が現れた。

決して透明な球体の輪は、それらの侵入を許さなかつた。

裸体者達は、男でもなく、女でもなかつた。

多くの球が現れ続け、花火のように、輪に衝突し弾け、あつといつ間に裸体者達が、ウジ虫のように沸き上がりつていつた。

裸体達は、無言であつた。

いつの間にか、透明な球体達が、輪を囲つてしまつた。

一重にも、二重にもなつてあふれた。

サンチエスと呼ばれた男は言つた。

「ありがとうございます。」

輝く木が言つた。

「苦難の後、私はあなたに、多くの人を救う指令を下せます。

サンチエス、見てみなさい。

輪の外には、汝に救わたい魂たちが、溢れています。

行きなさい。

行つて魂を救い、勇氣を下せなさい。」

と言つと、一つの木は一体となり、輝きを増した。

「あつがとへりぞこまよ。」

とサンチオスはまづひと、振り向いて、夢の主に向かい、歩き出した。

ゆづくつと、穏やかな眼差しとともに歩いて来た。

大きく手を広げ、夢の主を抱きしめゆづとした。

男が、夢の中に入つた。

夢はそこで終わつた。

誠は味わつた事のない充足感に満ち、目覚めた。

## 輝く木の想い

光り輝く木の最終目的は、人間たちを、楽園と言われる幸せな国に導く事である。

楽園は、邪悪な魂が侵入出来ないようになり、結界が施されている。

結界は、見渡す限りの大きな川である。

そこには幾つかの門がある。

それぞれの門の前には、光り輝く木が選んだ、善の心しか持たない、み使いたちが立っている。

地上での役目を終えた人間の魂は、み使いの前に導き出される。

そして、どのような靈も、労りの言葉を『えられる。

やがてみ使いは、川を渡らせる為に、船に乗るようになり、靈に勧める。

み使いは、魂に、

「何事かあっても、赦してやるよ。」  
と、言って送り出す。

そして、楽園に入る為の、最後の試練が待っている。

川には、風は無く、音も無く、明かりは眩しく一面を照らしている。  
ゆっくりと船は川岸から離れ、動き出す。

向こう岸は、白い霧の壁に覆われていて全く見えない。

すると、白い歩んだ下界の生活が、川面に映し出されていく

靈は懐かしさで、映し出される映像に食い入る。

もちろん見たくないステージもあるが、映像は繰り返していく。

始めは靈の善行が、映し出される。

細にわたり、靈魂たちが忘れていた事まで、細かく記憶されている。

その次に待っている映像は、靈魂たちの悪行である。

ここで発狂するかのように、頭を抱えて船の上で懺悔する者がほとんどである。

懺悔する事で、生前に犯した罪は、その時に許される。

しかし、中には川面に映し出された者に対して、大声で罵倒を浴びせる靈がいる。

叫びは、聞くに耐えない罵倒の羅列である。

そこで悔やむとか、憎しみが甦り、川面に叩きの者に対して、拳を振るう者もいる。

憎しみが走った瞬間、船がゴムのような軟体物になり、その靈を、球のように包み込む。

そして、川の奥底にゅうくりと廻りながら、沈んでいく。

輝く木が、最後の悔い改めを『えたにも関わらず、憎しみを抱いて、地に落ちて行く靈魂たちは、後を絶たない。

その昔、セバスチャンも、この川で球になつた。

その兄であるルドルフも、セバスチャンの妻であるアンナもそうであつた。

輝く木は、愛の存在である。

セバスチャンの靈魂を、井上祐一として蘇生させた。

次の人生では、  
「人をも、自らも殺すなけれ」と祈りを込め、玉を割つた。

セバスチャンの妻であるアンナの靈魂を、真由美として蘇生させた。

次の人生では

「自分のように、人を愛するように」と願いを込め、玉を割つた。

さて、裁判官サンチエスであるが、彼は玉に囮まれる事なく、川を渡りきつた靈魂であった。

しかし、川を渡つた世界では、一番下の層にいた。

神は魂の力を上げるために、誠として蘇生させた。

次の人生では

「行動で人々を助けなさい」

と祈りを込めて送り出した。

蘇生された靈魂たちは、純白に再生させられて、喜び舞うように、螺旋の軌道を描いて、地に放たれる。

地に着く間、次の人生で関わりを持つ靈魂たちが、集まつてくる。

その軌道は、うねりを増し、蘇生を喜ぶように光り輝くのだ。

ここで、弟の妻を汚したセバスチャンの兄であるルドルフであるが、まだ罪に対する苦しみの償いが終わっていないため、蘇生は許されていなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2524y/>

---

ラセン

2011年11月17日19時17分発行